



# たてやま

# おらがんまつり

## 南総祭礼研究会

2018.11 No.39



# 川名

## 館山市船形地区



川名地区を流れるとんどん川

江戸時代に四国から勧請された金刀比羅神社を中心に町が栄え、昭和の頃は料

館山市の北の端に位置し、江戸時代前には「河名」の地名で呼ばれていた古くからある地域です。江戸中期の元禄大地震で隆起した土地を当時の船形村、川名村、那古村の住民たちが開墾し、古川新田、川名新町、那古浜新田などの造成やとんどん川の治水工事を、新しい浜の土地「新町」ができて、そこへ住民が移り住みました。明治十二年、船形村と川名村が合併し船形町となり、明治三十年に船形町と改称、昭和十四年に館山市と合併し現在に至ります。

### 地域の紹介

亭、遊郭などが立ち並び、地曳網漁やあぐり網漁が盛況で活気が溢れる漁師町で、大漁時には獲った生簀の数の大漁旗をあん船(網船)が掲げて帰港しました。現在は百四十七世帯ほどが暮らす漁師町の面影が残る町で、神社の行事を中心に親密さが伺える地区です。

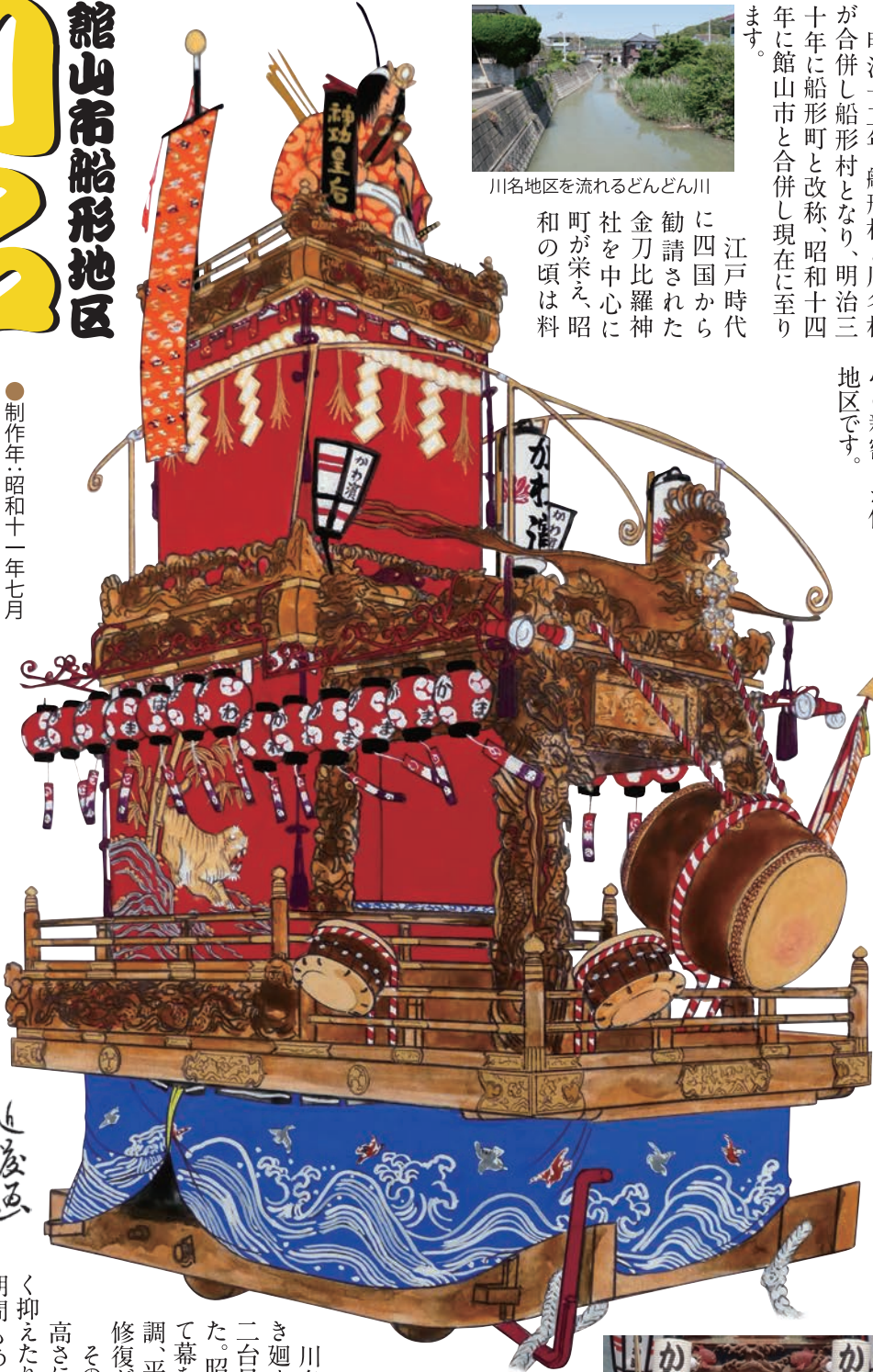
### 自慢の山車

無数の彫刻に覆われた重厚感にひととき目を引かれる川名の山車。囃子座左右の極太の柱の見事な龍が「忠君愛国」の扁額を挟み、その上の桐の木に鳳凰が鎮座しています。左右の欄間には後醍醐天皇と楠公、後方の柱には牡丹と獅子が彫り込まれ、さらに柱と欄間の角にも龍、山車幕高覧の上にも獅子がはめ込まれ、四方が彫物に囲まれた囃子座

に上があれば、自分が彫り物の中に身を置いていたような錯覚を感じます。四体の力神が支える下高覧には、棹には収まりきらないような生き生きとした龍、中高覧は雲間に麒麟、波間に鯛と千鳥、上高覧は波間に鯛、欄干に絡む龍の彫物と、漁師町としての川名ならではの意匠となっています。中高覧と上高覧の四段は彫物で一体化しており見事な造形美を作り出しています。

人形は臨月の神功皇后、下方

に目を向ければ、左右90度近くまでできる梶棒と土台の桁前方が反りあがっているのが特長的で、桁の反りは昔、砂浜へ山車を入れる「御浜出」の際に曳きやすくしたものとされています。幕には竹林の虎と龍の刺繍が施され、後方には川名区の中でも海側の漁師町であることから「川浜」と呼ばれていた通称がその誇りとともに刺繍されており、提灯にも同じく「かわはま」の文字が描かれています。



- 制作年：昭和十一年七月
- 彫刻師：後藤義孝(三代目後藤義光の弟)
- 山車額：忠君愛国
- 人形：神功皇后
- 上幕：注連縄
- 大幕：竹林の虎と龍
- 提灯：かわはま
- 半纏：天狗の羽団扇



見事な彫刻と「川浜」と書かれた幕

御出の際に曳きやすさを反った土台



鳳凰と龍に囲まれた迫力ある山車正面

川名には大山車と金毘羅神社の夜宮に引き廻す小山車があります。現在の大山車は二台目で昭和十一年七月にお披露目されました。昭和二十三年には地元館山の長須賀にて幕を新調し、昭和五十六年人形の衣装新調、平成二十年には美術大学の協力での幕の修復が行われています。その間道路の舗装に伴い低くなった鉄橋の高さに山車の高さを合わせるために全高を低く抑えたり、区民の意見により祭礼が休止された期間もありましたが、現在では新たに発足した青年会を中心に区民総出で準備や当日の引き廻しを行い、活況を呈した漁師町の豪華な山車と賑やかなお祭りの風情を今に伝えています。